國學院大學学術情報リポジトリ

明治三十年　八代国治日記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 比企, 貴之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000709

國學院第五期卒業生集合写真（國學院大學図書館蔵）　卒業式の翌８日に國學院玄関にて撮影されたもの。日記の同日条にも卒業生・職員一同で写真を撮影したと記されており、このとき上掲の集合写真が撮影されたことが判明する。（本文 p.85 ～ 116 参照）

吾輩ト共ニ業ヲ卒ヘタル本間茂世君ハ家用ニヨリテ歸郷セラレ撮影ヲ同セサルヲ遺憾トス

國學院第五回卒業生

明治三十年　八代国治日記

比企貴之

ここに紹介するのは、日本中世史を専門とした明治・大正時代の歴史学者・八代国治[1]（一八七三〈明治六〉年～一九二四〈大正十三〉年）が、國學院在学中の一八九七（明治三十）年に記した日記（自一月至七月）である。

［収蔵の経緯］

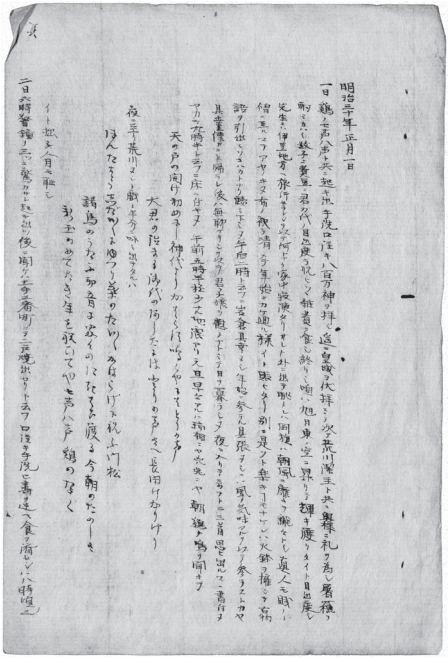
二〇一六（平成二十八）年十一月、売立に出ていた「「八代国治資料」一式」を國學院大學研究開発推進機構（校史・学術資産研究センター）が購入した。「一式」とあるとおり、本稿で取り上げる日記のほか、諸種の自筆原稿群、『吾妻鏡』諸本論の嚆矢的研究『吾妻鏡の研究』の入稿前最終原稿、東京帝国大学史料編纂掛在職期のものと思しい史料調査・採訪時の調査メモなど、総点数一〇〇点以上に及ぶであろう史料群である。なかには彼の号である「高嶺」に因む「高嶺文庫」の蔵書印が捺されたものも含まれている。なお、「総点数一〇〇点以上に及ぶであろう」というのは、すでに原稿用紙の結束やメモ類のまとまりが崩れてしまったものも多数存在し、目下整理作業にあたっている最中であることによる。

一方、日記は、他の原稿・メモ類との弁別が比較的明瞭であり、その全容を容易に捉えることができた。のちに

近代史学史上に大きな足跡を残す八代国治の、その青年期に記された日記は、日本中世史研究者からの関心が高いことが予期されるとともに、近代史学史とくに國學院大學においては学校史の観点からも重要な史料といえることから、ここに取り急ぎの紹介と翻刻をおこなうものである。

［形態］

縦二四・五糎、横三三・〇糎の料紙を袋綴じにした、冊子形態の日記である。いわゆる和装本を製作する際の下綴じ穴に相当する穴がある（本綴じ穴の痕跡はない）が、購入時にはすでに綴じ糸のないバラバラな状態であった。日記は明治三十年一月一日条から七月十一日条までを全一五葉に記す。最後の記事である七月十一日条は、國學院を卒業した八代が、就職のことを相談すべく恩師萩野由之を訪ねたところ、萩野から東京帝国大学文化大学史料編纂掛への紹介状を貰うという内容である（後述）。七月十二日以降の分は紛失しているらしい。というのも購入時、すでに綴じ糸がなく雑然としていたこと、収録記事の下限が七月十一日と中途半端である一方、内容については区切りの良い箇所で終わっていることなどを考慮すると、本来は翌十二日以降も日記は書き続けていたと考えるべきである。恐らく、市場に流れる際、内容を一定程度考慮し切り売りされたのではないか。本稿で取り上げる部分はわずか



半年余りの期間に過ぎず、今後、日記の続きあるいは他年次分の発見が心待ちである。とはいえ、当該の期間はちょうど卒業論文執筆の佳境に差し掛かった時期に相当し、学生八代の学生生活や学問的関心を生々しく伝えるものであるとともに、当時の出来事にも言及している点でまことに興味深いものといえるだろう。

［内容］

日記には、英照皇太后の崩御、ハワイへの日本人移民の上陸拒否問題、足尾銅山鉱毒事件といった社会的出来事にも触れている。とくに英照皇太后の崩御に際しては、國學院の諸行事が中止されたり、授業の延期措置が講じられている。発柩祭の日には、青戸波江[2]の先導のもと飯田橋校舎から千駄ヶ谷を経て青山へと至り、学校関係者一同で出棺を見送ったことなどが記される。また当時の八代が国学に傾倒していたらしいようすや下宿生活の一端についても窺い知ることができる[3]。

日記を読み進める参考のため國學院の第五期生（全二五名）[4]一覧を付す。同期には、のちに日本近世・近代の社会経済史研究で知られる澤田章（在学中は旧姓櫻木）、近世後期政治史・対外関係史の泰斗・井野邊茂雄、また文法研究の堀江秀雄、そして石清水八幡宮の宮司となる田中俊清らの面々がいた。なお、本誌本号の口絵図版として、國學院大學図書館蔵「國學院第五期卒業生集合写真」を掲載した。「「八代国治資料」一式」のうちのものではない。在学中の八代の成績は終始優等で、並み居る俊英たちのなかでも抜群の成績を修めていたという[5]。とくに卒業試験の判定結果にかかわり、あらかじめ「万一五期生中から卒業試験落第者が出た際には、学校側に働きかけをおこなう」ことが五期生のあいだで約束されていたことにかんする一連の記事は興味深い。果たして、豊福民秉、神田眞雄、櫻木章[6]、甲斐幸雄らの落第が明らかになると、八代以下、田中俊清や井野邊茂雄らが働きかけに着手したようすが日記から判明する。また同級生のうち早川純三郎は、のち一九〇九（明治四十二）年に国書刊行会の経営を継承し、古典籍

科	名 前	本 籍	卒業論文題目	卒業後	備 考
本科	金田 菊三郎	東京	貞永式目を論ず	牛込高等女学校	
	北原 熊士	福岡	南朝の一忠臣	台北帝国大学専門部、台湾教育会	
	高垣 虎吉	北海道	大久保石見守長安		
	寺本 善一郎	千葉	北條早雲	千葉県佐倉尋常中学校	
	中村 富哉	福島	北畠准后と南北朝と		
選科	井野邊 茂雄	高知	足利時代の皇室史	東京経済雑誌社。のち東京帝国大学史料編纂所、東京大学、國學院大學	
	岩本 正木	長野	武士道		
	神田 眞雄	長崎	（未詳）	八幡神社（現長崎県佐世保市重尾町）	卒業試験落第
	澤田　章（旧姓桜木）	京都	（未詳）	東京帝国大学・同図書館、三井家編集部、國學院大學	卒業試験落第。ただし、のち第5期卒業とされる。
	関藤 通熙	岡山	家康公の創業		
	田口 重男	茨城	徳川光圀	三重県第一(津)尋常中学校、歌人、曙会同人	
	田中 俊清	京都	後水尾天皇の御譲位	男山(石清水)八幡宮	
	豊福 民秉	福岡	黒田如水	福岡県住吉神社	卒業試験落第
	難波 常雄	岡山	万葉時代の道徳	宏文学院、渡清	
	西久保 白愛	東京	徳川初代の経済		
	早川 純三郎	東京	片桐且元と豊臣滅亡と	国書刊行会、國學大学	
	堀江 秀雄	東京	大日本通俗語法論	皇典講究所、國學院大學	
	本間 茂世	新潟	幕府創立論	八幡宮（現新潟県佐渡市八幡）	
	水落 松次郎	富山	語法学発達	岩倉鉄道学校	
	宮澤 岩太郎	長野	謡曲論	長野県尋常中学校	
	八代 国治（旧姓鈴木）	東京	大宰府考	東京帝国大学史料編纂掛	
	山内 岩雄	山形	富士谷成章	北海道師範学校、松屋呉服店、奉天神社	
	綿貫 豊次郎	富山	南洋諸国の日本人（家康前後）		
別科	吉田 光長	東京	徳川時代の神道家	八幡神社（現東京都港区西久保八幡神社）	
選科	甲斐 幸雄	熊本	藤原隆家		卒業試験落第。第6期卒業

國學院第5期生一覧

の翻刻・編集・刊行事業に取り組む。日記には一八九七（明治三十）年のある日、八代と早川が国学や国史学への気負いを大いに語らうなかで「行ク末長ク共ニ此道ノ為メニ務メン事ヲ」を誓った（一月二十二日条）ことが記される。八代は学問の途に就き、早川は史料の出版事業というかたちで、かつての約束が果たされていることも日記を読み進めるうえで興をそそる。このほかにも岩倉具張・具幸の兄弟、有嶋武郎らの名を検出することができ、八代の学外における交友関係を明らかにする。

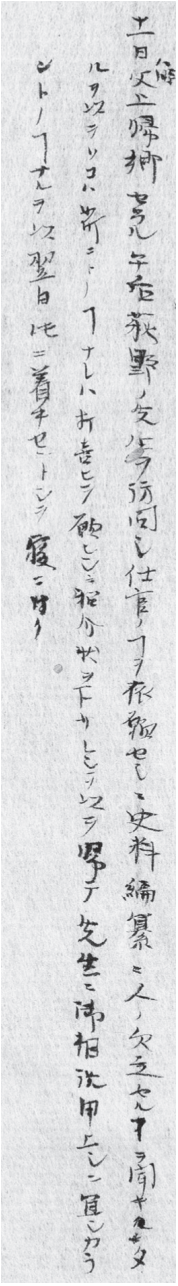
最後にとくに八代の卒業論文、史料編纂掛への就職、そしてのちに彼の体を蝕む病魔についても触れておく。

［卒業論文］

彼の卒業論文の題目は「大宰府考」であった。日記には執筆のため上野図書館に終日籠もったり、同級生から書籍を借りるようすが記されるほか、大宰府について質問するべく湯地丈雄[7]を訪ねるなどしている。なお、「「八代国治資料」一式」には、卒業論文の「総説」部分と覚しき自筆原稿も含まれており、それによると全九章立ての論文だったようである（整理中）。周知のごとく、八代の研究は『吾妻鏡』、モンゴル襲来、そして王家領荘園についてと、その対象と範囲は多岐にわたる。とりわけその主著に『皇室御領史』『長講堂領の研究』があるように、荘園研究への熱の入れようには並々ならぬものがあったが、畏友井野邊によると八代が荘園研究に本格的に取り組み始めたのは、一九〇七（明治四十）年頃のことであったという。

［史料編纂掛への就職］

國學院を卒業後、ほどなく十月に八代は東京帝国大学文化大学の史料編纂掛に入る。その契機について、従来、井野邊の談に基づいて恩師である池邊義象の推薦によるとされてきたが[8]、七月十一日条の記述から実は就職について八代が萩野由之へ相談したこと、その際萩野から紹介されたことが端緒であったことが明らかとなる。以後の二ヵ月強



の動静を伝える記事がないことが惜しい。

史料編纂掛では『大日本史料』の編纂業務に従事し、各地の史料調査にも勢力的に取り組んだ。一方、卒業後も母校である國學院との関係は密であったらしく、一八九九（明治三十二）年からは第五期生を中心として史学講究会を結成し、國學院で活動を開始している。一九〇九（明治四十二）年、私立國學院大學（一九〇四〈明治三十七〉年に専門学校令による私立國學院となり、一九〇六〈明治三十九〉年に私立國學院大學となる。）において国史学会発足の機運が高まりその結実に至るや、八代は会長三上参次のもと、活動の中核的役割をになうこととなる。[9] さらに、一九一一（明治四十四）年には講師を属託され、「南北朝史」の科目を担当するなど後進の育成にもあたっている。また、このかん一九一〇（明治四十三）年には、石清水八幡宮の田中俊清から『男山八幡宮史』（のち『石清水八幡宮史』として刊行）の編纂を依頼されており、一九一七（大正五）年に至る足かけ六年に及んでこれの原稿作成にもあたった。[10]

［アクチノミコーゼ（放線菌症）］

一九二三（大正十二）年春、八代は史料編纂掛の同僚と千葉県を訪れた際に盲腸となり、それが契機となりアクチノミコーゼ（放線菌症）であることが発覚し、五月に東京帝国大学附属病院に入院する。以後、若干の病勢の緩和はみられたようだが、翌年四月一日、容態が急変し、翌日に逝去した。

八代が亡くなったのは大正十三年四月二日、五十二歳であった。諸書に掲載の追悼記事からアクチノミコーゼ（放線菌症）が死因であることは疑いない。ところが、日記には学生時代の八代の体調にすでに異変が生じていたようすも記されている。日記の二月上旬には「鼻ヨリ出血甚シク、風邪ノ気アルヲ以テ早ク帰ル、」（二月十日条）と突然の体調の異変が記され、その後も頭痛、激しい歯痛や咽頭痛・頬の痛みなどが長引いていた。（本人は風邪とみていたようである。）病状改善のため幾人もの医師にかかるなどしたようすも記されている。これが将来のアクチノミコーゼと結びつくかは未詳だが、興味深い一文といえよう。

註

（1）旧姓は鈴木。千葉県市原郡（現市原市）戸田村高根の鈴木吉蔵の次男として一八七三（明治六）年一月二日に誕生した。國學院卒業後の一九〇一（明治三十四）年二月に八代房吉の養嗣子（房吉息女琹子に配偶する）となり、八代姓となる。こんにち八代国治の名が通用しているので、本稿題目および解説にあたっても八代を用いる。

（2）安政四年（一八五七）～一九二九（昭和四）年。皇典講究所・國學院大學の祭式教員として神社祭式行事作法の基礎を築く。草創期國學院の主事として学務の中心をになう。明治三十年当時は、講師として「剣術」の科目も担当した。

（3）日記からは、国学について同級生と論談に及ぶことたびたびであったようすが分かる。また彼の思想形成には、従兄に東洋史研究者で朝鮮史から「満州」、モンゴル、西域に至る広大な地域の史的研究に取り組んだことで知られる白鳥庫吉がいたことも影響するのではないか。井野邊茂雄によると、八代は上京後入学までのあいだ白鳥邸に寓居していたという（同「文学博士八代国治君の事ども」〈『房総郷土研究』第六巻第六号、一九四〇〉）。日記からは、彼が「塾」（現東京都新宿区市谷仲之町四付近に所在）に寄宿ないしは下宿していたこと、同塾の主と思しき人物を「先生」と呼んでいたことなどが判明するが、これが白鳥およびその邸宅であったかは未詳である。

（4）うち四名は卒業試験で落第判定。

（5）堀江月明（秀雄）「双涙録」（『國學院雑誌』第一三巻第六号、一九二四・六）。

（6）『國學院雑誌』第三巻九号（一八九七・七）の彙報「第五回國學院卒業生の卒業論文」および國學院同窓会編集の『新國學』第一〇号（一八九七・七）掲載の「國學院第五期卒業生」にはともに櫻木の名前はない。一方、甲斐は翌年第六期生として卒業している。豊福、神田らは院友（卒業生）名簿に検出できず、そのまま退学したか。ところが、澤田は右掲雑誌に卒業生として記載はないが、のち例えば昭和期の院友名簿などには「第五期生」として掲載されているだけでなく、「國學院第五期卒業生集合写真」にも収まっている。落第から一転して第五期卒業生とされるようになった経緯や事情は不明である。なお、学生だった澤田と「剣術」の科目を担当した青戸波江は喧嘩をし、その後和解することのないままであり、同級生の堀江秀雄は澤田没後の追悼座談会の席で「恐らく卒業証書は持ってはゐまいだらう」と述懐しており（「国史学会記事」〈『国史学』二二、一八九七〉）、あるいはこのあたりの事情が関係するか。

（7）弘化四年（一八四七）～一九一三（大正二）年。元寇記念碑建立の主唱や、亀山上皇の銅像建立や高橋熊太郎との共著『元寇』（鵜飼兵太郎、一八九三）で知られる。

（8）前掲注（3）井野邊。同「八代博士を想ふ」（『武蔵野〈故八代博士追憶号〉』第一六巻第三号、一九三〇・九）。

（9）「学会の改革に就いて」（『国史学』一、一九二九）。

（10）比企貴之「石清水八幡宮の史料と修史」（『石清水八幡宮研究所報』創刊号、二〇一二）。

【凡例】
・翻刻は原本における用字に準じた。
・記主による行間細字注や（　）を用いた記載と区別するため、翻刻・校訂者による参考注（　）および校訂注〔　〕は、小塚ゴシック（Light）体を使用した。
・人名注は当該人物の当該月初出にのみ付した。

明治三十年正月一日

一日、鶏ノ七声八声ト共ニ起キ出、手洗口注キ、八百万神ヲ拝シ、遙ニ皇城ヲ伏拝ミテ、次テ荒川潔主ト共ニ奥様ニ礼ヲ為シ、屠蘇ヲ酌ミカハシ、数子ニ煮豆ニ君カ代ノ目出度ヲ祝ヒツヽ、雑煮ヲ食シ終リシ頃ハ旭日東ノ空ニ昇リテ輝キ渡リタ〔ヌカ〕、イト目出度シ、先生ニハ伊豆地方ヘ旅行セラレシヲ以テ何トナク家中寂莫タリ、サレト外ニ出テ眺メレハ、国旗ハ朝風ニ靡キヲ翻々トシ、真人モ賤■〔人カ〕僧ニ至ルマテ、アヤノキヌ布ノ祝ヲ清メテ年始ニカケ廻ル様イト賑ヒタリ、別ニ是ソト楽キ事モナケレハ、火鉢ヲ擁シテ古物語ヲ引出シソコハカトナク読ミ下シヌ、午后二時ト云フニ岩倉具幸ヌシ年始ニ参ラル、具張〔岩倉〕ヌシニハ風〔邪脱〕ノ気味アルヲ以テ参ラストカヤ、具幸主僅カニシテ帰ラレ後ハ無聊ナリシヲ以テ、君子嬢ヲ慰メナトニテ日ヲ暮ラシヌ、夜ニ入リテ哥ナト二三首思ヒ出ルマヽ書付ヌ、ヤカテ九時半ト云フニ床ニ付キヌ、午前五時半、極少〔小〕ナル地震アリ、元旦早々アルハ瑞相ニヤ凶兆ニヤ、朝鶏ノ鳴ヲ聞キテ

天の戸の開け初めにし神代より
かはらす鳴くやにはとりの声

大君の治まる御代のあしたには
とりの声さへ長閑けかりけり

夜ニ至リ荒川ヌシト戯レ半分ニ咏ミ出テタルハ

ほんたはらしだい〳〵にゆつり葉の
たい〳〵かはらげに祝ふ門松

諸鳥のうたふ初音に家々の
にきはひ渡る今朝のたのしさ

新玉のめてたき年を祝ひてや

七声八声鶏のなく

イト拙シ人目モ恥シ

二日、六時警鐘ノ三ッニ驚カサレ起キ出ツ、後ニ聞ケハ土手三番町ニテ二戸焼出セリト云フ、口注キ手洗ヒ寿ヲ述ヘ食ヲ済セシハ八時頃也、朝ヨリ西風擾カシク吹スサミ寒サイミジ、九時ト云フニ硯ヲ洗清メ書初メニ昨日ノ哥ヲ冊短(ママ)ニ書付ヌ、十時田口重男主来賀セラレ直ニ帰ル、今日モ昨日ト同シク何ノ為ス事ナク、古キ史ナトヲ読ミアルハ、君子ヲ慰メテ日ヲ済ス、年賀状ヲ野沢常太郎、寺本善一郎、竹内璋司、半沢久一郎、宮嶋信太郎、有嶋武郎、吉田正一、堀江秀雄、難波常雄、沢柳猛武(行カ)雄ノ数氏ニ出ス、夜ニ入リテハ昨日ト同シク荒川主ト共ニ種々世間話ヲシナカラ、餅ヲアブリ蜜柑ヲ食ベナトシテ腹フクラカシ、十時過ニ至リ驚キ床ニ付カントセシニ遠クスリハンノ音聞エルト同時、三ッノ警鐘寝漠ヲ破リテ耳朶ニ達セシヲ以出テ見、十町ハカリ北方原町近傍降(際カ)ニ火起リテ火子ノ飛フ事瞭然タリ、是ニ於用心ニ如クナシト貴重ノ書籍ヲ悉ク倉庫ニ入レ終リハ十一時ニシテ火モ又下火トナリタリ、後ニ聞ケハ全焼十四、半焼九トノ事ナリ、寝セシハ十二時過ナリ、

三日、七時起床、昨日ト同シク屠蘇・雑煮ニ腹フクラカス、九時半頃早川純三郎主来賀セラレ酒宴ヲ開キ、種々国学ノ事ニ付テ論談シ、午后二時食ヲ終ヘ共ニ出ツ、此時岩倉具張主風邪恙クナリシトテ来賀セラレ直ニ帰ル、余ハ早川氏ト甲良町ニテ別レ、市村(瓚次郎)、栗田寛、大村長兵エ、青戸波江、本居豊頴、依田雄甫、萩野由之諸先生ノ宅ニ年始ニ廻リ、最後ニ市ヶ谷八幡ニ詣テ帰リシハ四時ナリキ、五時荒川氏ト共ニ湯ニ入ル、夜ハ昨夜ト同シク雑談シテ過ス、去ル

一日二日

天皇陛下ニハ御不例ニ渡ラセラレ拝賀仰付ラレサリシ由新聞、又相州津久井郡吉野駅ハ、去ル年十二月廿九日全駅焼失シ焼死十三人、重傷九人アリタリ、誠ニイタハシキ事ニコソ、（以上二件読売新聞）吉田正一、堀江秀雄二氏ヨリ年賀状来ル、金壱銭五厘

八残、

四日、午前七時起床、書物ノ整調ヲナシ吾妻鏡ヲ繙ク、（終リテ）午后荒川主叔父ノ基ニ宿ニ行キ、独リ徒然ナルマヽソコハカトナク史トモヲ見ル、二時半頃先生帰宅ス、六時岩倉具張君臺ニ手紙ヲ出ス、用向ハ先生ヨリノ命ニテ病ヲ問フノ意ナリ、夜十時寝ニ付ク、金貳銭、切手金貳銭砂糖使用ス、

五日、七時起床、食ヲ終リ八時家ヲ出テ、岩倉具張氏ノ病ヲ霞ヶ関ナル宅ニ訪フ、具幸・具美（岩倉）両氏モ居ラル、十時假（暇）ヲ告ケ早川氏ノ宅ニ至リ、史学上ノ話ニ興ヲ催ス、ヤカテ酒食ノ馳走ニ預リ帰途ニ付キシハ一時ナリキ、是ヨリ九段ヲ過テ神田冨山房中西屋マテ至リ、書籍ヲ持来タル、家ニ入リシハ二時頃ナリ、時皆ハ新年宴会ナルヲ以テ諸官衙ノ官吏皆酔歩満跚（ママ）トシテ、大道モ狭キ風ニテ通リシモヲカシカリシ、午前七時家兄来ル、其用向ハ弟賀一郎（年賀ト共ニ）修業ノ為メナリ、八時半荒川氏ト共ニ三人シテ入湯ス、時ニ天蒙（濛）々トシテ将ニ雨（フ脱）ラントス、床ニ入リシハ十時、早川氏ノ宅ニテ世界日本新聞ヲ見ルニ、おかまト云ヘル乞考者アリテ、銭ヲ得レハ随テ呑ミ呑ミテ、酔ヘハ余ス所ノ金ハ悉ク之ヲ捨テ顧ミス、睡ヲ催セハ突然トシ大道ノ傍ニ伏シ、人■酒ヲ与フルモ飲マス、手シテ口ノ元ニ持テ行ケハ、一斗ヲモ飲ミ、其物ニカヽラハサハヲ見テハ、古ノアレキサンダーノ体ノ賢人否仙人ニモ勝リタリトアリ、実ニカヽル仙人モアレハアルモノカ、

六日、七時起床、雨降ル、八時頃止ミ漸々雲散シ、九時ニ至リテ快晴、家兄ト共ニ家ヲ出テ、番町ヨリ紀尾井坂ナル清水谷ニ大久保賜（利通）右大臣ノ英魂ヲ弔ヒ、弁慶橋ヲ渡リ赤坂一木ニ至リ、麹町区ニ出テ日枝神社ヲ詣テ、裏霞ヶ関ニ出テ、有栖川宮ノ門前ヲ通リ、桜田ヲ九重ノ上弥尊キヲ拝ス、御池頂ノ松ハ緑イヤ増シ、春梢風吹ク春風ハ静カニシテ林ヲ鳴ラス、御池ノ水波穏カニシテ、千歳ノ亀悠心トシテ楽シケニ遊ヘルナトイトメテタシ、ヤガテ九拝シテ、和田倉ヲ出テ大倉省門ヲ通リ、神田橋ヲ過キ、小川町ヨリ

万世橋ヲモ打過キテ、上野ニ着キシハ十二時過ニシテ、腹スキシヲ以テ天プラニ飽キ、一時ト云フニ彰義隊ノ墓ヲ弔ヒ、蒙古侵来ノ油画ヲ見、悲壮凛烈惨憺惨鼻、一見人ヲシテ奮起セシム、人ヲシテ悲哀ニ涙ヲ注カシム、殊ニ湯池〔地〕丈雄ノ慷慨悲壮、熱満胸ノ熱血ヲ注キテ説明スルアリ、之ニ加フルニ時ニ勇壮悲哀ノ楽隊ヲ以テシソ、ロ涙ノ出ツルヲ知ラス、二時半此ヲ出テ博物舘ヲ見ル、此モ終テ此ヲ出ツル頃ハ、夕陽漸ク地ニ落テ、晩鳥鵬ニ帰リ、根津ノ鐘声樹間ニ響クノ時ナリ、忍池弁天及鎮遠ノ錨台湾号等ヲ見、本郷湯島天神ニ一休シテ市中ヲ睥睨シ、天時ト云フニ本郷春木町ヲ退キ、ステニ一酌ヲ残シ兄上ト共ニホク〳〵ト暗キ水戸屋敷ノ後ヲ通リ、神楽坂ニ出帰宅セシハ七時ナリ、昼ノツカレニ忍ヘサレハ、九時床ニ入ル、此日万世橋近ニテ詞八街語釈一冊十銭ニテ買、二銭下足、壹銭軍歌、

七日、曇天時々少雨アリ、九時兄上荒川氏ト共ニ出ツ、二銭■不足分、

三番町ニテ荒川氏ニ分レ、神田井ノ辺茂雄氏ト逢ヒテ本ヲ買ヒ、壹円ヲ兄上ヨリ受取リ小川町ニ兄上ニ分ル、一橋ヲ渡リ竹橋ニ入リ、半蔵門ヲ出テ具張氏ノ為メ、麹町区役所ニ出頭シ用ヲ済シ、郵便局ニテ為替（先生ノ用）ヲ出シ、二番町ニ行ク間雨ニ降ラル、豊福民秉・田口重男ノ二氏ヲ一寸訪問シ、原〔神〕田眞夫ニ年始ニ廻リ、帰宅セシハ一時ナリ、午后清少納言・詩人西行（共ニ小本）ヲ読ム、八時半具幸君帰リ、九時半具張君帰塾ス、十時半床ニ入ル、

香川県〔香川県さぬき市〕寒川郡長尾村大字長尾西平民国安■〔平カ〕吉ノ妻かつ（香川郡太田村平民串田繁次長女）ハ十二年間一日ノ如ク病母ニ使ヘテ倦ムナク、且ツ貧苦ナルヲ以テ薬代等ニ不足スル也、夫ニ際シク自分ノ衣ヲ売リ以テ母ノ薬ヲ買ヒ、夫ニ貞実ニシテ農業ヲ励ミ、其間ニ子女ヲ教育セシヲ以テ、事終ニ知事ニ聞エシヲ以テ旌表シテ十円下賜ス、去年十二月廿六日小学校ニ於テ郡長・村長初メ教員等臨ミ、盛ナル式ヲ挙ケタリト云フ時ニ、丸亀隊司全官森少佐モ臨席セラレ

タリ■ト、徳ノ事ナリ、（読売）

八日、曇天、午前八時家ヲ出テ萬朝服（報）社ニ至リ、一ヶ月分二十五銭ヲ払ヒテ上総ニ送ルヘキヲ命ス、帰リ本屋ニ寄リ清少納言其他見料二十二銭五ノ払ヒ、萩野先生宛ニヨリ先生ノ用ヲ済セ十二時帰宅ス、午后西行ノ評論雑志ナトヲ読ム、五時具張氏ト入浴ニユキ三銭使用ス、夜雑談シ何ノ為スナク過ス、

天皇陛下ノ御不例ノ所、全癒アラセラレタル由、誠ニ目出度コトニゾアル（七日読売）

九日、雨九時頃ヨリ雪ト変シ飜々トシテ降ル、鵝毛ノ如ク、綿ノ如ク、直チニシテ四方■々タリ、夕方ニ至ルモ止マス、積ル事五寸余、六時頃ヨリ再ヒ雨ト変シ、アハレヤ半ハヲ損セリ、時ニ土曜日ニ当ルヲ以テ塾中ニテ福引ヲ成ス為メ、各人思考ヲ凝ラシ雪中ヲ侵シテ品物ヲ求メニユキ、全ク調ヒシハ六時過ニシテ、其題ハ先生清盛ノ最後（死カ劣（シガレット）等巻煙草）、三種神器（代々譲ル橙譲葉）、藤原秀郷（ムカデハカナハム蜜柑）、日清戦争（全勝ハンケチ二本）、志那ノ外債（日本ニ制シタ外国ノ貸（菓子）シ日本制ノビスケット）、具張氏二ツ志那古代ノ学者四人（鳥子紙・草紙・雁皮紙・洋紙）、寺ノ貸家（カステラ）、具幸氏四亜米利発見者（コロンハス（コロバス）タルマ）、牙山蔣（洋紙帳）、ナマクラ武士（二心魚）、外ニ一ツ、潔氏二ツ（宮中ノ玉簾（君カ中ニアル玉子）、鬱シタル婦人（インキ）、余ノ分ハ北見ノ宗谷岬（二本ノ箸）、馬関ニ李氏ノ為メニ独名ヲ挙ク（砂糖珠墨）等ニシテ、中々面白カリシ、是ヨリ百人一首哥ルタノ合戦アリ、盛ニシテ激戦数回、後源平ニ分レテ平氏ハ具幸・潔二氏ニシテ、源氏ハ具張主ト余トニシテ、先生之レカ叛（判）者タリ、三回ニシテ初・二回源氏数ヲ取リシモ、其後ニ全勝ヲ揚ケ共ニ興ヲ尽シテ寝ニ入リシハ、九時半ナリキ、此日華頂宮博恭王殿下ト徳川慶喜ノ九女常（経）子結婚セラレタリ、

十日、七時起床、雪ノ後ナルヲ以テ寒シ、昼ノ間トヤカク雑用雑談ニテ暇ヲ費シ為ス所ナシ、夜ニ至リテ四人シテ花カルタノ遊戯ヲ為シ、九時床ニ入ル、具

張氏ノ談ニ　皇后太后陛下御大病ニシテ侍医付キリノヨシ、誠ニイタハシキ事ニコソ、

十一日、六時半起床、学校ニ至リシニ午后トナル、午后再ヒ行キニ（ママ）　皇太后（英照皇太后）御大病ノ為メ遠慮、始業式延引、夜大宰府ノ事ヲ研ヅ、午后七時官報新聞号外アリテ　皇太后陛下御病気ノ御容態アリ、去八日頃御増寒アリ、発熱四十度、御脈百十四、御呼吸三十、御胸痛、次テ急性肺炎ノ御重症トナリ池田（謙斎）・橋本（綱常）・岩佐（純）・三浦（省軒）・ヘルツ（エルウイン＝フォン＝ベルツ）ノ聞手青山御所ニ詰切リ、拝診セシモ病勢ハ次第ニ増加シテ、今十一日午前九時ニ至リテハ容易ナラサル御様子ト相成ラセラレタリト云フ、吾人臣下タルモコゾッテ八百万神御祈リ申セリ、ア、誠ニイタハシキ事ニコソ一日モ早ク快復アラントヒタスラニ祈ル、九時先然ルニ号外ニヨリ実ニ痛　大息マヘキノ服アリテ皇太后陛下午后六時終崩去アラセラルト、ア、〳〵

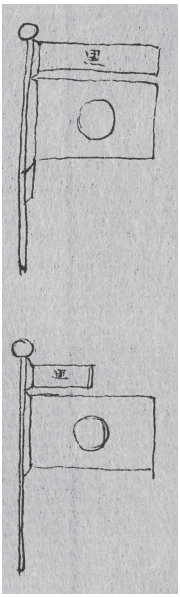
十二日、六時起床、曇、ハラ〳〵ト雪降ル、天モ亦我皇太后陛下ノ崩去ヲ悲ミナルヘシ、一日謹慎、夜ニ至リテ具張主ト番所マテ買物ニ行、帰リ井ノ辺君ヲ訪フ、留守ナルヲ以テ万朶ヲ置キテ帰ル七時帰宅ス、八時先生ニハ参内、天機伺ヲ為セリ、官服（報）号外十一時ニアリテ国民一般ノ喪三十日間仰セ出サレ、営業者ニ限リ十五日間歌舞・音楽禁■セラレ、其他ハ三十日間ト定メラレタリ、十二時床ニ入ル、

十三日、六時起床、午前十時学校ニ行キ、時間割ヲ見ル時ニ青戸主事ヨリ皇太后陛下崩去セラレシニ付キ、種々慎ムヘキ事ヲ懇々説諭セラレ、且ツ今回ハ遠慮ノ為メ始業式止メラレ、休業五日間授業ヲ十八日ヨリト定メラル、午后何ノ為スナク家ニ居ル、午后雪行悪シク八時頃ヨリ雨降リ後雪トナル、

十四日、七時起床、窓ヲ開ケバ四方皆真白ニテ、アヤシノ垣イフセキ木ナトモ皆時ナラヌ花ヲ咲セ、其美シサ言ハン方ナシ、地上ニ積リシ所ハ七寸余モアリテ、猶止マス降ル事多々益ナリ、謹慎ト雪トナルヲ以テ家ニヒタスラ蒙リ居テ為ス事ナシ、午后ニ至リテ微雨トナル、

皇太后陛下崩去ニ付キ宮中喪仰出サレタリ、一週〔周〕年卅年一月十一日ヨリ三十一年一月十日マテ一期二十五日、二期二十五日、三期三百十五日、又是ガ為メ各学校及貴衆両院等、皆弔意ヲ表スル為メ休ミ、其他新聞及諸々ノ会、運動等悉中止トナル、

十五日、微雨止マス、皇午后六時頃止ス、夜ニ至リ蒙朗タル月出ツ、皇太后崩去ニ付三十間国中喪ヲ仰出サレタル為メ、意喪ヲ奉表スル為メ、国旗ヲ掲タル者ハ左式ニヨルヘキ様、内閣ヨリ告示アリタリ、前期十五日間ハ旗竿ノ上部ニ旗ノ長ニ等シキ黒色ノ片布ヲ付ス、後期十五日間ハ旗竿ノ上部ニ旗ノ長ノ半ニ斉シキ黒色ノ布片ヲ附ス、但シ御発棺及御埋棺ノ当日ハ前期ノ式ニ依ル、



昨日ノ大雪ノ為メ電柱折レ、電線ヲ絶チ、電話等ノ不通ニシテ其損害甚シト、又樹木ナト倒レシハ数知レスト、余夕方市ヶ八〔谷脱〕幡神社ニ散歩セシニ、大樹ノ折レ倒レタル者ヲ見タリ、サレト微雨ノ為メ積殆ト解容シ失セタリ、暖ナリ、

十六日、曇、午前学習院マテ行ク、午后十二時半地震長ク強シ、道路泥濘甚シ、国喪中各学校ノ心得文部省ヨリ達アリ、一謹慎静粛ヲ専トシ、深ク敬悼ノ意ヲ表セシムヘシ、一制服又ハ筒袖ヲ用フル者アリテハ、黒色ノ布片ヲ左腕ニ纏ハシメ、其他ニ在テハ左肩ニ宜適〔ママ〕之ヲ添付セシムヘシ、一制帽ヲ定ムル者ニアリテハ、黒色ノ布片ヲ以テ徽章ヲ覆テ帽ヲ巻カシメ、

十七日、雨降ル、午后八時地震、其他ニアリテハ適宜帽ヲ巻カシム、一女生徒ハ服装ヲ成ルヘク質素ニシテ、目立ツヘキ頭髪ノ粧飾ヲ廃セン■ヘシ、

十八日、大雨、学校ニ行ク、午后七時岩倉兄弟帰リ、皇太后陛下ノ今際ノ事ヲ受玉ルニ、兼テ先帝来三十日三十年祭ナルヲ以テ、京都行啓ノ事ヲ思召シ玉ヒシニ、風気ニ在ラセラル、ヲ以テ、侍医御止メ申上シニ、是

非行啓シタキ由ナレハ侍医モ今ハ止ム、御意ノ通リ申上ニイミシユ喜ハセラレ、御自ラ種々ノ御品物御手ツカ荷ツメナトシテアラセラレシガ、病重カニナラセラル、ヤ、此度ハ何如(ママ)ニモシテ、祭日前ニハ快ニナラセ度ト申サレト、カサシテ(ネカ)天モ知リ玉ハヌニヤ、遂ニハカナクナラセ玉ヒシカハ、人々涙ニムセヒシトナリ、ア、昨日ハ現世ニテマカルエカリシニ今ハナキカラトナリテ京都ニ参ルトハ、人生イカニハカナシトハ云ヘ今更ノ様ナリ、

又受玉ルニ、去ル十一時日、天皇陛下ニハ皇太后陛下ノ御病ヲ御親シク御見ソナハセ玉ヒキハニ、御クツ召シノマ御座ハラセ玉ヒシニ倚ニアリツル、臣下ソノイトシキ様ヲ見ルニ忍兼ネサセ、御クツヲ御タキ遊ハサレハイカ、ト申上シニ　天皇陛下ニハ只ダハラ〳〵ト御涙落サセ玉フノミナレハ、傍ニアリツル人々袖ヲシボラヌハナカリケルトゾ、ア、今更申スモ畏シ、今上

天皇陛下御大孝ニアラセラル、ヲ以テ、大日本ノ国能ク治マリテ、不孝ノ者絶ヘテナキ事ニコソアルナレ、

十九日、雨降ル、午后止ム、寒甚シ、夜風邪ノ気味アルヲ以テ入浴シ九時寝ス、二十銭会費十二銭、史海三冊壱銭、五ー人給代、

二十日、快晴、

廿一日、此日松本講師ヨリ、大喪ニ関スル諡号ノ事ニ於付(行)テ講話サレタリ、

廿二日、快、午后三時学校終リテ早川氏ト共ニ、同氏ノ宅マテ大宰府参考書ヲ借リニユキ大ニ論談シ、国学ヲシテ大ニ起サ、ルヘカラサル事、国史学ノ大ニ研メサルヘカラサル事、吾人青年ノ大ニ励奮スヘキ事等ニ付テ盛話シ、或慨シ、行ク末長ク共ニ與ニ此道ノ為メニ務メン事ヲ誓ヘリ、終ニ日ノ暮ル、モ知ラス、晩食ノ饗応ニ預リタリ、六時半綿貫豊次郎主来リテ共ニ史学上ノ事ヲ論シテ、九時早川氏ニ辞シテ帰リ、家ニ着キシハ十時ナリキ、

廿三日、快晴、午后一時本郷ナル神田眞夫氏ヲ問ヒ、今年始(初)対面ノ相サツヲ述ヘ、次テ文学上ノ論談ヲナ

シ、三時同氏ヲ辞ス、午后七時先生ニハ法顕法師ノ大旅行記ヲ講話セラル、

廿四日、午前、室内ノ掃除テ服ヲ費、誠ニ口惜シ、午后論文ニ付テ研メントセシニ、寺本善一郎主、国ヨリ帰京セシニ付キ来リシヲ以テ、種々面白キ話ヲナシ、移テ国文学上ノ議論、学校ノ事ナトニ付テ話ス、三時清一君ト力丸ノ御花様上京セラル、是ニ於愈々研究ノ時機ヲ失シ、遂ニ全ク書物ヲ見ルヲ得ス、夜三番町ニ用事アリテユキ、帰リ一寸寺本氏ヲ尋ネ郷土史ニ付テ話シ、七時帰半(行)帰ル、昨日午後一時、衆議院ニテ大喪費七十万円ヲ可決セリ、

廿五日、御発棺ハ来二月二日ト決定セラル、其順序ハ二月二日御棺前祭執行、午前八時御発棺(青山御所)、午前十時御順路青山練兵場仮停車場ヘ着御、青山停車場御発輦正午、二月三日京都七条停車場着御午前八時三十分、四・五・六三日京都大宮御所御滞棺、七日大宮御所御発棺、午後一時御順路後月輪新御陵着御、八日御棺前ニ於御祭典執行、未明ヨリ終テ御担棺、大喪葬ノ際参列スヘ〔キ脱カ〕者、供奉員被案内者、参列ヲ仰付ラルヘキ者、参列許サルヘキ者ノ四種トナシ徽章與フ、大臣、親任・勅任官ハ柑子色絹布ノ結、高等官ハ麻布結、衆議院議員・府県会議員・新聞記者ハ鈍色ノ麻布、其他鶴喰色麻布ニテ左胸ニ付着スル者ナリト、比頃天下一般皆藤衣着シ、静粛哀悼ノ意ヲ表スルヲ世ノ中寂漠スモ、又同意ヲ表セルニヤ日シブケカチナル天気ナリ、カヽル際ニ当リテ最モ悪ムヘキハ、救世軍ナト自ライハリチラシテ、耶蘇教ヲ広メントスル矢吹幸次郎トカ云ヘル愚物ハ小石川表町四角ニ立テ、大喪中ヲ憚ラス、大声ニテ演説ヲ始メタリト云フ、サレ当局者ニテモ違警罪トシテ五十銭ノ科料ニ処シタリ、

廿六日、我至仁至聖ナル　天皇陛下ニアラレテハ、去年十二月三十日ヨリ　皇后陛下ニアラセラレテハ、本月五日ヨリ御風気ヲ召サレテ、差シテ重ラセ玉フトハナケレトモ、今ニ御熱少々アラセラレテ御床ニ召ラルヽヤ、モレウケ玉フル誠ニ〻〻先ニハ皇太后陛下

ノ御他界アラセラレ、今又カヽル事ヲウケ玉ル、イタハシキ事ナリ、我等臣伏シテ祈リ奉ル、一日モ早ク御心快クナラセラレン事ヲ、

廿七日、

廿八日、午后六時力丸御花様及清一君ト共ニ、四谷通リニユキ、天プラソバ数杯ヲ喰ス食シ、九時頃帰宅ス、

廿九日、午前八時、花様・清一君帰国ス、午后三時半卒業論文ノ事ニ関シ、田中俊清氏来リ、種々話シ且ツ余ヨリ忠告ヲナシ、史学雑志ヲ貸與フ、明日十日ヲ以テ京都ニ行ハセラルヽ、先帝孝明天皇ノ三十年祭ニ　天皇陛下ノ御代拝小松宮彰仁親王殿下ノ　皇后陛下ノ御代拝同宮御息所頼子殿下ニハ昨日午前六時京都ニ赴カセラル　皇太后陛下御葬送ニ付キ二月二日・七日・八日各官庁事務休停スヘキ旨仰出サル、

三十日、本日ハ先帝孝明天皇ノ三十年祭日ナルヲ以テ、起床清浄シテ読書ヲ止メ、奉祭ノ敬意ヲ奉ス、其祭日ノ順序ヲウケ玉ルニ

早朝御陵前ヲ装飾シ、軈テ午前九時ト為ルヤ諸員一同幄舎ニ着キ、九時二十分御出門アラセラレ警部四名前駆ヲ為シ、儀杖兵第九聯隊（大津衛戍）第三大隊ハ月輪山下ニ整列シ、神饌十二台ヲ供シ奉リ、終テ其間五常楽ヲ奏シ、次テ御幣物ヲ供シ奉リ、終テ式典主任岩倉掌典ハ御陵前ニ祝詞ヲ奏シ、其ヨリ今上陛下御名代小松宮殿下、　皇后陛下御名代同御息所殿下御玉串ヲ捧ケラレ、次テ又皇太子殿下御名代東宮亮足立正声氏御代拝、御玉串ヲ捧ケラルヽ由ナリト、

三十一日、午前八時、上野図書館ニユキ九時入場シ、大宰府ノ事ニ付キ研フ、財料多クアラサルヲ以テ、一時出館、泉水保正君ヲ尋ネ、暫クシテ共ニ出テ、飯田町ニテ分レ、寺本氏ヲ問ヒ五時宅ニ帰ル、

本日官報号外ニテ減刑令出ツ及大赦令発布セラル、朕茲ニ大喪ニ丁リ恵澤ヲ施サムガ為、特ニ命シテ左ノ条項ニ依リ減刑ヲ行ハシム、

朕茲ニ大喪ニ丁リ恵沢ヲ施シ、台湾新附ノ民ヲシ

テ詔ク皇化ニ霑ハシメムガ為、勅令第七号ニヨリ減刑ヲ行ハシムルノ外、仍左ノ条項ニヨリ特ニ大赦ヲ行ハシム、条項略、

減刑ノ結果トシテ放囚〔カ〕ニナルヘキ囚徒ノ数合計

一万三千二百八十九人、

二月

一日、雨、御須屋工事本日落成セリ、朝鮮奉弔大使李夏栄氏ハ金声遠・崔錫駿ノ二氏ヲ従ヘ広島ヨリ来着、古格ノ町自身番千六百ヶ所皆建設ニ掛レリ、以上皆

一月三十一日■（京カ）都発ノ電報、

徳島県板野郡鶴島浦村藍商王居宗三郎ノ母御定（定ノ夫宗次郎）ハ今年七十、八歳ナル砌ヨリ千辛乃苦シテ夫ヲ助ケシ余暇貯蓄■■ナシニ千余円ノ高ニ上リシヲ以テ去月（年）十二月二十九日親戚一同ヲ集メ、高齢ノ寿賀ヲ妻子金子分配シ祝宴ヲ開キタリ、其分配ハ嫁おくら一千円長女おその、次女春野、養猛ニ各百円、三女房江長安次郎・次男廣一ニハ各五十円、須見団平ノ子息弥平ニ三十円、御定ノ実妹おてうニ二百円ヲ挙テ、酒宴ヲ開キテ、和気藹々一堂歓ヲ尽シタリシハ〔中脱〕目度カリシ、其譲渡書老人ニハメツラシケレハ書ス、

一通用金一千円也、

一筆書のこし申候、私嫁女此上もなき孝心にて、何角日ころ心ニ懸くれ尽、夜共に心に懸くれ兄弟までもくれ〳〵心を付、是れ大にありかだく（ママ）存候、何卒反礼と存申候、此金母若き時よりみをつゝしみ、しまつ等を致したる内ゑ何角心をつけてしまつをいたし此上の大金にいたし、其上は子孫に譲り相渡す事、偏に頼入申候、第一家を守りて朝夕に神仏を拝し、御先祖大せつにいたし、子供大せつに、よろしき杓子御しいれ可被成候、第一火の用心猶々大せつに被成、猶はか参りさい〳〵御頼申候、

まつはこれ迄書遂申候、目出度きよし候、

明治廿九年十一月二〔十脱〕五日　王居宗次郎母さだ

嫁おくらどの

ア、此老媼ノ如キ一家ノ風ラ吹カテ槇ヲ折ル者トヤ云ハン、アナメデタ、

二日、午前大雨、今日ハ皇太后陛下ノ御柩ヲ送リ奉ル為メ、身体ヲ清メ、九時ト云フニ寺本氏(善一郎)宅ニユキ、共ニ九時半学校ニ至ル、泥甚シ、十時青戸(波江)主事先導ニテ■千駄ヶ谷村ニ至リ（青山ハ余地ナキ為メ汽車運行ヲ奉送スル定メナリ、）着セシハ十一時ナリキ、寺本・早川(純三郎)両氏及余等、徒ニ是ニ三時間雑談シ費スモ恐レント思ヒ、青山ニ向ヒ奉送セントシ至レハ、吊砲連発シテ天地ニ響キ為ニ天地モ慟(働)哭スル者ノ如シ、練兵場ニハ諸学兵士満チ、人民之ニ伴ヒ、喪服ヲ着シ、愁然トシテ声ナク、寒風空ヲカスメ、寒鳥枯木ニ寄リ、其凄絶云ハンカタナシ、ヤガテ騎馬先道ニテ、

（空白アリ）

質素ヲ極メタリ、楽隊ハ哀シノ極ミヲ奏シ、ラッパ同シク悲哀ノ曲ヲ吹キ尽キヌ、名残ヲ惜ム者ノ如也、此ノトキ雨全ク晴レンモ、人々ノ袖ハ猶乾カス、目モ又ドンヨリトシテ悲哀ノ意ヲ表セリ、余亦亡(忙)然、涕泣スル者稍久ス、カクテモアラネハ友ノ誘フニ驚キテ、急キ千駄ヶ谷ニ至リ、一時半ト云フニ学生整列シテ最ト静粛ニ御柩ヲ侍(待)ツ、二時ト云フニ静々ト御通行遊ハサレハ、ヒタブル感慨ノ涕ニカキクレヌ、程ナクケムリヲ後ニシテ出行玉ヘルゾ口惜シキア、、、、

三日、

四日、下女ナキ為メ塾中不都合アルヲ以テ、学校ニユカス、

五日・六日、仝シク然リ、

七日(八ミ)、英照皇太后陛下ノ御埋棺日ナルヲ以テ、九時遙拝式ヲ学校ニテ行フ、帰リ寺本氏ノ宅ニユキ、後来ノ方心目的等ニ付キ、大ニ論談シ、十一時帰ル、

九、十両日、学校ニ行ク、十日午后鼻ヨリ出血甚シク、風邪ノ気アルヲ以テ早ク帰ル、

十一日、風邪ノ為メ全ク床ニアリ、十二・十三日同シ、

十三日午后寺本氏見舞ニ参ラレ誠ニウレシ、人ハ実ニ同県ノ者ニアラスンハ如何ト千生親密ト雖トモ、事アルトキニ当テハ、■分ニ力ヲ尽シクル、者ナシ、

十五日、医師ニカヽル、此夕方ヨリ歯・頬・頭非常ノ苦痛ヲ感シ、忍ヘラレス、翌日再ヒ南町穴倉医師ニカヽル、サレトモ更ニ減セサルヲ以テ、十六日河合慶次郎先生ニ皮下注■〔射〕ヲ行ヒ貫ヒ、漸ク凌キシモ、此ヨリ以後、毎日午前八時半ヨリ起リ、十二時頃マテ甚シク、午后ニ至リテ減スルヲ以テ肩ニ六ヶ所、腕一ヶ〔所脱カ〕、顔面二箇所等ニ行ヒ、漸次痛ヲ減シ、服薬ヲ為、二十一日頃ヨリハ大ニヨシ、二十日午前、大村御孝二十日午后〔日脱〕具幸氏〔若倉〕様ヨリ見舞物ヲ少々、切橙ヲ持チ来リ、病ノ欝ヲ慰ム、二十五日手紙ヲ寺本氏ニ出シ、此夕再ヒ見舞ニ来ラレ、誠ニウラシ也、且ツ其以前ニモ見舞状二度モ下サレ、其誠謝意ニ余アリ、

二十八日、清一君来ル、此トキハ大ニ病ヨワマリ、殆全日床ヲ離ルヽヲ待タリ、

三月

一日、病大ニヨシ、サレトモ猶歯及頬ノ苦痛全ク去ラス、

二日、

三日、君子ノ祝ナルヲ以テ勉メテ起キ、午后種々馳走アリ、塾生一同楽ヲナス、夜ニ至テ寺本氏〔善一郎〕三度見舞ニ来下サレ、学校ノ事ナト、何ニクレトナク配慮下サレ有難シ、九時半帰ル、

四日、大ニヨシ、清一氏帰国スヘキノ所、用アリテ延ス、

五日、清一君帰ル、余病勢大ニ宜シ、サレト心地勝レス、甚タ怠ルシ、

六、七、八日、相変ラス心地勝レサルヲ以テ床ニアリ、

九日午前三時ヨノ咽喉甚シク痛ヲ感ス、早朝医師ノ基ニ尋レハ、甚タ悪シキヨシニテ消酸〔硝カ〕銀ヲ以テ焼ク、此日風甚シ、午前田口〔重男〕氏見舞ニ来降セラレンヨシナレトモ、丁度医師ノ宅ニアル間ナリキ、午后一時難波常雄君見舞ニ来テ下サル、種々学校ノ事ナト談シ三時頃帰ラル、時ニ学習院医師宮義茂来リテ診察ヲ

受ケシニ、熱三十八度八分有ルヲ床ニネル様云ヘル、夜ニ至テハ熱度甚シク三十九度七分ニシテ、咽喉頭部苦痛甚ダシ、学習院助手佐々木鉚(力)太郎氏来リシヲ以頓服ヲ貰ヒ、漸次熱薄ラギ、快ヨク寝ス、ア、天ナルカ命ナルカナ、今卒業論文ニ最モ暇ノ惜シキ所、三十余日モ床ニアリ、今ヤ将ニ全快ナラントシテ此患ニ逢フ、ア、如何スヘキ、況此トキハ三浦松次郎・荒川潔ノ両氏モ枕ニツキ、次テ奥様モ床ニ入ル、其惨憺タル有様今筆ニセンモ恐シ、

十一日、佐々木氏多忙ナリト云フヲ以テ、別ニ渡辺医師ヲ招ク、午后四時来診セラレ（扁桃腺ヘントウセ）ト云フ病ニテ胃腸モ悪シキヨシ、此時分ノ苦痛ハ中々ニ語ニモ筆ニモ尽セス、午前九時、三浦氏帰宅、午后三時岩倉具幸病傳ノ憂ヲ避ケテ帰宅ス、此ヨリ先キ幸具氏エ非常ノ世話ヲ受ク、

十二日、雨フル、午后三時過キ、早川純三郎氏病気見舞ニ来ラル、三時間許話シ、大ニ欝ヲ慰ム、

十三日、病追々ヨシ、荒川氏ハ起床セラル、

十四日、午后六時、寺本善一郎氏病気見舞ラル、氏ハ固ヨリ信アル友ドチナルガ、余ノ病ニカヽルヤ、前後是ニ四度来テ下サレ、人ノ憂ヲ自ラノ憂トナシ、以テ何ニカニト配慮セラル、此夜一泊ス、

十五日、寺本氏飯モ食差ケテ早朝帰セシハ、本意ナカリキ、是レ亦止ムヲ得サル事状ノ存スレハナリ、願クハ氏許セヨ、此頃ヲク足尾銅山鉱毒事件、漸クヤカマシク、当地ノ人民二千(八百)名モ出京シテ、事状ヲ哀奏ス、余輩是ヲ聞ク、誰カ涙ナカラン、況ンヤ当局者皆金銭ニ目眩ミ、人民ノ憂苦ヲ顧ミス、賄賂ヲ受ケ以以テ人民ヲスカズ(好)カ如キニ至テハ、誠慨嘆ニ忍ヘサルナリ、ア、世澆季ニシテ人情薄キ事、紙モヨリモ甚シク、金銭ヲ重宝トシ、道徳ヲ羽毛ノ軽キニ比ス、サテモサカシラノ今ノ世ナルカ、

十六日、荒川氏病止テ昨日ヨリ出校セリ、午后田口重男氏見舞ニ来ラル、

十七、十八、十九(日脱)、漸々快方ニ赴キ、時々ハ起床シテ書物ヲ見ル、

廿日、午后、寺本氏来テ病ヲ訪フ誠ニ有難シ、二十二日外出、早川氏ヲ訪フ、

廿三日、試験ノ下調ノ為メ寺本氏ノ宅ニ至リ、昼夕ノ食ヲ馳走ニナリ、八時二十四分ノ気〔汽〕車ニテ帰宅ス、

廿四日以後三十日迄、筆記ナキヲ以テ皆人ノ下ニ至リ、一夜造リニ苦心シテ試験ヲ受ク、故ニ其結果甚タ悪シ、

三十日、午后三時即試験最終ノ日、第八万菜会ヲ開キ、探題ニテ歌文ヲ造ル、二時ニシテ皆作リ終ル、戯文アリ、歌アリ、古文アリ、通文アリ、皆ソレ〳〵花ヲ咲セタル、一層ノ面白キヲ感シタリ、此日、難波君、丸山正彦先生ト議論アル為メ、五時半、早川・松下（大三郎カ・八期）・堀江（秀雄）氏ト共ニ出立タレ、水落（松次郎）・中村（富哉）両氏又去リシヲ以テ、残ル者井ノ辺（井野辺茂雄）、神田（貞雄）、寺本、田中（俊清）、余ノ数氏ノミ、然レトモ論談愈快ニシテ、八時半ノ気〔汽〕車ニテ井ノ辺氏ト共ニ帰宅ス、

三十一日、雨ニ降■メラレテ出ツル事モナラス、

四月

一日、先生ノ用及ヒ家ヨ荷〔リ脱〕物来リ、医師ニ寄ル所、徒ニ日ヲ消ス、

二日・三、俗事ノ為メ同シク徒ニ過ス、三〔ママ〕：田口氏ヲ尋ネ伏敵編ヲ借リ、寺本氏（善一郎）ノ宅ニ回道セシニ、途中ニテ逢ヒ田中（俊清）トモ合セテ共ニ興ニ早川氏（純三郎）ヲ尋ネ、一時帰宅ス、

四、五、六、七、〔日脱〕論文ノ研ヲナセシモ、所用アリテ思フ所ニ行カス、七日午后、荒川（翠）氏磯部ニ旅行ス、

八日、午后二時ヨリ湯地武雄先生ヲ尋ネシニ、留守ナルヲ以テ萩野（由之）先生ヲ訪問ス、時ニ御在宅ニシテ心快ヲノ面会セラレ、歴史上ノ疑問ヲ尋ネ、午后後ニ歴史ヲ研究スル事モ依頼セラル、四時半帰宅ス、

九日、

十日、

十一日、午后、自転ニテ運動ストモ、トキ田口君来リ失敬ス、今ヤ実ニ卒業論文ノ時ニ際リ、カク悠々閑々トシテ遊気ノ付キシハ、抑モ何タル心ソヤ、我ナカ

ラアキレハテ候、

十二日、午后三時、湯地丈雄先生ヲ尋ネ、

十三日、午后三時、湯地丈雄先生ヲ尋ネ、大宰府ニ付テ尋ヌル所アリシニ、先ハ左ノミ深クシラヌトテ、別ニ学江島茂逸・山田安栄両氏ヲ紹介シ来レタリ、比ニ袷ヲ大ニ喜ヒ辞去リテ、赤坂黒田宅ニ江島氏ヲ尋ネラレモ留守ナルヲ以テ、徒ニ帰宅ス、時ニ五時半、

十四日、家ニ在リテ論文ヲ調ブ、四時起キ出テ、五時家ヲ出テ江島氏ヲ赤坂ニ問フ、面ノ当リ話ヲセシモ、古キ事ハ知ラスシテ、終ニ其要領ヲ得ル事ナクシテ帰ル、六時半、綿貫氏ヲ尋ネ、大ニ談シ歴史上乃外国語ヲ学ハサルヘカラサル事ヲ談シ、七時帰ル、八時早川氏ヲ問ヒ、十時帰宅ス、午后論研究シタリ、

十五日、四時起床、手洗口ソ、キ、八幡神ヲ拝ス、午前読書ス、午后四時夕食ヲ為ス、荒川氏ト共ニ三浦■次郎氏ノ病ヲ小川石ノ宅ニ尋ヌ、時ニ来客アリ、充分居ヌヲ得サリシモ、病日ニ能クシテ顔ノ美シキヲ拝セシ、イト喜シカリキ、猶此上大切セテヒン事ヲ云ヒヲ別レ、余ハ本郷四丁目ノ山田氏ヲ尋ネ、荒川氏ハ上野ノ楼見ニユキヌ、山田氏先生ノ宅ニ着ハ、直ニ御面会ヲ得テ、丁寧ニ御教授下サレ、且ツ書物ナトヲ大ニ心配致シ下サレ候、大ニ益ヲ得タリ、八時帰宅ス、此頃布哇移民上陸拒絶事件ニ付テ、外務大臣ノ實怠ヲ攻撃シ、大畏伯ヲノ、シル声ハヤマシ、内ニハ鉱毒事件ノ難問題アリ、外ニハ布丶ノ事件ヲ生シ、サスガ智才ノ大畏モ、両手ノ小児ヲ持チガ如ク、実ニ気毒ノ次第ナリ、サレハ外交ノ如キ我国体ニ関スル者ナレハ、実ニ伯其ノ罪軽ラサルナリ、況ンヤ我同胞非常ニ惨邀イタムヘキ、悲シムキ、石灰ヲ巻ケ、消毒所ニ入レ、アマツサヘ米ノ如キモソレニ與ヘ、終ニヲノ〳〵此等数百人ヲ帰国セシメタリ、ア、誰カ同胞ノ為ニ■ク■カサル者アランヤ、

十六日、論文ヲ書始ム、サレトモ折リ〳〵用事ノ在ル、怠惰トニアリテ思フ如ク書ケス、

十七日、前日ニ同シ、午后七時井辺氏ヲ尋ネ、三代格

ヲ借ル、
十八日、午后（前十時）、国学院ニユキ、田中財料（材）ヲ求メ、二時田中氏ヲ尋ネ、留守ナリシヲ以テ、田口氏ニ会ヒフ（扶）桑ヲ借ラシトセシニナカリキ、此折九岡氏ニ久シ振（桑略記カ）ニテ逢フ、カクテ帰宅セシハ四時ナリキ、
十九日、論文ヲ書キ続ク、
二十日、論文一通リ書キ終ル、午后五時井上頼国（圀）先生ヲ訪ネシニ留守ナリキ、依テ早川氏ヲ尋ネシモ同シク居ラス、徒ニシテ帰宅ス、午前大雨、本郷ステ先（駅カ）生ノ用ニテユク、
二十一日、上野図書館論文財料集メニユク、午后五時半帰宅ス、此日井野辺・田口・桜木（章）・神田（眞雄）・西久保（白愛）数氏集リタリ、夜論文ノ征正（校）ヲ成ス、
二十二日、論文ノ草稿ヲ訂正シ、且ツ補フ、
二十三日、仝上、
二十四日、論文ノ清書ニ着手シヌ、
二十五日、
二十六日、
二十七日、卒業論文ホ、成ル、是日先生ニハ寒冒（ママ）ノ気味ニテ床ニ在ラル、具幸（岩倉）氏仝シク寒冒ニ臥サル、
二十八日、卒業論文全ク成ル、先生・具幸氏共ニ床ニアラル、
二十九日、卒業論文ノ誤字ヲ正ス、具幸氏病殆ト快方ニ赴キ、帰宅セラル、夜中ニ至テ先生大ニ快キ由ニ受タマハル、
三十日、卒業論文ヲ学校ニ出サントセシモ、来二日転宅セントスル準備ノ為メ忙ハシク、出サヽリキ、此日清一君来京セラル、

五月

一日、午前九時、卒業論文ヲ青戸（波江）幹事ノ本（ママ）ニ出ス、午后戸籍寄留ノ件ニ付キ、夜中岩倉弟（邸カ）マテ参リ、種々先生ノ言ヲ申上ケタリ、
二日、市ヶ谷仲ノ町四九番地（新宿区市谷仲之町四付近）ヨリ横寺町五拾八番（新宿区横寺町五五付近）へ転宅ス、車三台ニシテ数度往復シ、正午（午后）二時マテニ悉ク終ル、清一君・荒川君大ニ労力セラル、又大村様

ニ非常ニ御労力ヲ願ヒタリ、夜ニ至テ全ク整調、九時頃具幸(岩倉)主帰塾ス、

三日、学校ニ出ヅ、

四日、清一君帰国ス、

五日、

六日、

七日、

八日、

九日、

十日、

十一日、

十二日、

十三日、

十四日、春期遠足会ナルヲ以テ中村氏(富哉)ト共ニ四時半学校ニ至リ、六時出発、霊岸島ニ至ルトキニ佐々木(高美)会長及三四人既ニアリテ、余等一行ヲ待ツ、暫クシテ八時蒸気ニテ行キ、十一時横須賀着、造船所及軍艦あきつを拝観シタリ、時ニ四時過ナリキ、五時汽車ニ乗シテ、鎌倉丸屋ニ着セシハ、六時半ナリキ、

十五日、

十六日、

十七日、

十八日、

十九日、

二十日、

二十一日、

二十二日、

二十三日、

二十四日、

二十七日、

二十八日、伯母様出京セラル、

二十九日、

三十日、伯母帰郷セラル、五島御すみ様臨月ニ近キヨシニテ早々帰ラル、其ノ用向ハ種々アリシモ、重ニ(主カ)力丸ノ姉君ニ依頼サレシ事件ナルヨシ、

三十一日、

六月

一日、矢部忠一郎君午后五時入塾セラル、
二日、
三日、
四日、
五日、午后一時ヨリ難波主(常雄)ノ許ニ話ニユキ、夕食ヲ馳走ニナリ、六時頃共ニ宿ヲ出テ、寺本氏(善一郎)ヲ尋ネ、七時半帰宅ス、寺本氏宅ヘ行ク間、小川町ニテ泉水君(保正・二期)ニ逢フ、
六日、
七日、
八日、
九日、
十日、
十一日、
十二日、
十三日、
十四日、
十五日、
十六日、
十七日、
十八日、
十九日、
二十日、
二十一日、試験ニ着手ス、午后三時ヨリ、君子嬢ヂブテリヤ病ヲ避クル為メ、南榎木町(新宿区市谷甲良町一付近)四十六番地大村様(大村)ノ家ニ移ル、但シ奥様・御孝様及余ノミナリ、
二十二日、
二十三日、
二十四日、
二十五日、
二十六日、午后五時、西久保氏(白愛)ノ宅ニテ同級会ヲ開キ、奉恩会及ヒ送別会寄附金ノ事ニ附テ相談ス、
二十七日、午前九時寺本氏(善一郎)ト共ニ矢来町(新宿区)ナル村岡良弼先生ヲ訪問シ、上総・安房・下総ノ地理歴史上ニ付テ説ク伺ヘリ、十一時先生宅ヲ辞シ、山伏町ニテ昼

食ノ代リそばヲ食ス、十二時寺本氏帰ル、午后荒川潔君ト共ニ、四谷時計屋ニ至リ、帰路下駄ヲ求メ、田町ニテそばヲ食シ、柳町ニテ古物屋(董)ニテ徘徊七部集、千代尼句集ヲ求メ、又此道ニ付テ道具屋主人明ラカナリシヲ以テ、大ニ益スル所アリキ、此外広重ノ江戸名所図及能ノ珍書ヲ観タリ、午后七時清一君出京セラル、

二十八日、午后五時ヨリ神田開化楼ニテ我々ノ為メ送別会ヲ催サレシヲ以テ行ク、トキニ黒川博士(眞頼)、杉浦重剛先生ヲ始メ、井上頼圀・萩野由之・服部宇之吉・渡辺龍聖・福永(得之)・逸見仲三郎諸講師、青戸(波江)主事・菊間編輯員等ノ出席アリテ余等大ニ満足セリ、但々最モ不満足ナリシ事ハ芸妓ヲ挙ケシ一事ナリ、是テ余早ク帰中村氏ト共ニ帰リ、中村氏方ニテ大ニ談論シ、以遂ニ夜ノ更ルヲ知ラス、十一時半帰宅ス、

二十九日、午前九時、西久保宅ニテ同級会ヲ開キ、奉恩会ノ事ヲ議ス、中村君(富哉)ト余ト計算表ヲ作リテ、奉恩会及テ書籍別附(寄)両立ヲ動議ク選出シ、満場一致ミテ決ス、十二時帰宅ス、午后一時ヨリ清一君ト共ニ新ニ求メシ目白台ナル宅地ヲ見、更ニ次テ雑司ヶ谷ノ鬼子母神ヲ拝シ、縁起ヲ尋ネ帰路早稲ニ出テ、六時帰宅ス、

三十日、午前八時、清一氏ト共ニ寺本氏ヲ尋ネ、十時半比出テ神田ニ行キ、洽集館ヲ見昼食ヲナシ、清一氏ト別レ帰宅、一時ヨリ学習院ニ書籍返附ノ為メ車ニ積運送ス、矢部(忠一郎)・荒川両氏大ニ労力セラル、三時帰塾、入浴ス、是ガ為メカ身体大ニツカレ、七時頃ヨリ前後知ラス、寝ス、午后雨降ル、

七月

一日、蕭々トシテ雨フル、十二時井ノ辺氏(井野邊茂雄)来リテ種々歴史上ノ話及奉恩会ノ事ヲ相談ス、一時中村氏(富哉)ヲ尋ネ、留守、寺本氏(善一郎)ヲ尋ネ同シク留守、依テ山内氏(岩雄)ヲ訪ネ、四時頃マテ話帰宅ス、

二日、■■、卒業試験ノ結果次第ニテ、各先生方ヲ廻リテ、報恩会ニ招待セントシ、成績ヲ聞キニ行キシ

ニ、明ナラサルヲ以テサシタル事ナク徒ニ日ヲ消ス、
三日、午后四時頃、井ノ辺氏来リ、共ニ中村君氏(衍カ)ヲ尋ネ、留守ナルヲ以テ寺本氏宅ヲ問ヒ、是又留守ナルヲ以テ山内氏ヲ問ヒシテ、直今中村氏来リテ成績ハ明日午后四時ナルヲ以テ、各先生方ヲ是非明日中ニ招待ス様トノ話カリシトノ事ナルヲ以テ、井ノ辺氏ト神田氏(眞雄)ノ■(寄カ)リ行キ、招待状ヲ持帰リ、書状ヲ山内氏ニ半ヲ分チ、暫シ話ノ後夕食ヲ済シ、六時分レテ兼テ約セシ田口氏(重男)ヲ尋ネシニ居ラサリシヲ以テ、井ノ辺ト共ニ田口氏ノ約ヲ重セサル事ヲ憤リヌ、依テ再ヒ立寄ラン為メ、甲斐(六期)幸雄主ヲ訪ネヌ、九時半頃マテ試験及卒業後ノ方心ナトニ就テ話ス、此間磯崎又太郎主来リシガ、程ナク帰ラレタリ、余等二人立身館（甲斐下宿屋）ヲ立チ出、再ヒ田口氏ヲ尋ネシモ留守ナリシヲ以テ、止ムナク井ノ辺氏ニ別レテ帰途ニ付ク、時ニ数日以来ノ微雨ナレバ、泥濘イミシク下駄ヲ没スル程ナレバ、新道ヲ通ル能ハス、神楽坂ニ廻リ、十時家ニ帰ル、

四日、晴、八時井ノ辺茂雄・綿貫豊次郎両君来リ、名刺ヲ書キ、九時ヨリ栗田(寛)先生ヲ始メトシテ、各先生方御招待ニ参リヌ、午前中ハ栗田先生・市村(瓚次郎)先生御面会致シ種々ノ話ヲ受玉リ、時ヲ費シヽヲ以テ僅ニ他湯本(武比古)・日野西(光善)両氏先生ヲ廻リシノミナリシガ、共ニ留守ニテ面会セス、十一時井ノ辺宅ニテ昼食ノ馳走ニ預リ、二時間許休憩ノ後、麹町ナル逸見(仲三郎)・井上(頼圀)両先生ヲ尋ネシニ、面会スルヲ得テ、出席致ス事ニ相成リ、丸山(正彦)氏先生ニ往キシニ留守ナルヲ以、坂(正臣)先生・佐々木(高美)会長ヲ尋ネシニ共ニ留守ナリシヲ以テ、四谷ナル四屋(恒之)先生ニ参リシニ面会致サレ、出席ノ承諾ヲ得テ、久保(惠鄰)先生ニ詣リ留守ナリシヲ以テ、是ヨリ綿貫氏ニ別レ帰宅ス、午后五時半、井ノ辺氏来リテ試験結果ヲ尋ネント中村氏ヲ尋ネシニ、先刻出テ■■■■リ先生ノ下ニ参ラレシトノ事ナレハ、サテハ兼テ約セシ通リ、落第生アレハ運動スル事ヲ約セシナレハ、落第者アリシナラント思ヒ、自分ハ落第セサル事ハ信シテ居ル者ノ何トナク心トキメキセラレ

テ、一時モ早ク聞カント井ノ辺氏ト共ニ西久保(白愛)氏ヲ尋ネシニ、未タ知ラストノ事ナレハ、止ムナク寺本氏ノ許ニ行キシニ、余共成績明ラメ胸ヲ下セシ者ノ、落第者ハ思ハサル者ノミナリ、是ニハ亦大ニ驚キ、又即チ其人々ハ豊福民秉・神田眞雄・櫻木章・甲斐幸雄等ナリ、依テ手分シテ運動スル事トシリハ早川(純三郎)・中村・田中(俊清)三氏ニ託シ、余ハ井ノ辺氏ト先ニ上総金谷ニ旅行中ナル桜木ノ下ニ電報ヲ以テ帰ル事ヲ命シ、次テ日野西光善先生ノ許ニ行キシモ面会ノ機ヲ得ス、空シク帰ル、

五日、晴、九時半、日野西光善先生ヲ尋ネ、出席ノ有無ヲ問ヒアラレン事ヲ乞ヒシニ、御承諾アラセラレ、佐々木(高美)会長・坂先生・久保先生皆降(振)テ参ラルニ、何レモ御面会サレ、謝恩会ニ出席セラル、事ヲ承諾セラル、十一時頃帰宅ス、午后、萩野(由之)先生ヲ問訪(ママ)致シ、種々歴史上ノ話ヲ受ケタマハリ、大八州雑志地志目録ヲ借用シ参ル、四時半帰宅、井ノ辺氏来リシヲ以テ直チニ■赤城清風亭ニテ開カル、院友会ニ出席ス、六時開会、雑誌及会費■擴張等ニ付テ議シ、後酒宴ニ移リ楽シク愈快ニ論談シ、八時半帰ル、

(表出)「午后有嶋武郎主来ラレ」とあり。

六日、寺本氏ト共ニ京橋ナル阿部浩先生ノ許ニ参リ面会シ、国学上ノ話及ヒ国学院ノ事ニ付テ談シ、且ツ謝恩会ニ出席セラレン事ヲ乞ヒテ、御承諾ヲ得テ、十時帰、寺本氏ノ許マテ帰リ入湯シ、昼食ヲナシ、遊戯ヲ為シトコウスルウチニ難波(常雄)主来ラレ、電報ノ遅カリシ事ヲ聞キ、且ツ又成績及運動ノ事状ハ話シ、大ニ好結果ヲ得ル望ミアル事ヲ話シ来ル、既ニシテ、金田(菊三郎)・関藤(通熙)・豊福・甲斐・桜木等諸ノ諸氏来リテ試験ノ事ニ付キ話シ居ル内ニ、田中氏帰リ来リテ運動ノ好結果ナラサル事ヲ報シ、皆共ニ憂ヒタレトモ如何トモスル事能ハス、十時頃皆夫々別レテ家ニ帰ル、

七日、大雨、午后一時ヨリ卒業証書授与式ヲ行ヒシ、久我侯爵(建通)・鍋島侯爵(直大)・高崎男爵(正風)・其外貴顕紳士、及ヒ講師諸彦数百名、旧卒業生等数百名臨席セラレ、先ツ佐々木(高行)院長ノ告示アリテ後、各卒業生証書及ヒ賞品ヲ授与セラレ、次テ栗田講師ノ演説、久我(通久)府知

ノ祝詞、細川枢密顧問官（潤次郎）ノ演説ノ代祝詞アリテ甚タ盛会、余等ノ光栄実ニ■■■■■■■■余リアリト云フベシ、四時式終テ謝恩会ヲ開ク、諸先生大概御出席アラセラレ、七時諸先生方ニハ帰ラレ、其キリハ同級生及ヒ事務員トノ祝杯アリテ最モ愈快ヲ尽サレヌ、余ハ神田氏ノ剣舞ニ感シ、実ニ涙ヲ催シ、場ニ忍ヘラレサルヲ以テ直ニ帰ル、時ニ八時半ナリキ、時ニ鈴木信太郎主来塾セラル、

八日、午后一時、写真ヲ卒業及職員一同撮影ス、夫ヨリ寺本氏宅ニ遊戯ヲ弄ミ、夜遅ク帰ル、

九日、午前（后ヵ）、高等師ヨリ廻神田氏ヲ問ヒテ試験不結果ヲ慰メヌ、然ルニ氏度量ノ宏大ナル更ニ憂フル所ナク、平然タル実ニ感服スルノ外ナシ、既カ（ヤカ）テ堀江主来ラレ以後ノ方心等ヲ話シ、三時別ヲ告ケテ寺本主ヲ尋ネシニ、早川氏ヲ共ニ尋ネント出立チ、七時頃至リヌ、ヤガテ国学ノ話ヤラ、処生ノ方法ヤラ話シテ、九時半別レテ帰リ牛込見付ニテ寺本氏ニテ家ニ帰リシニ、具張（岩倉）氏来ラレ暫ク侍ラレシヨ実ニ残念致シ候、父上五時頃ヨリ来京セラレ待タルヲ以テ面会シ、卒業ノ事ナトヲ話シ、又処生ノ方ナトノ教ヲウケ玉ハリ、十一時寝ニ付ク、

十日、晴、午前八時半、父上ト共ニ家ヲ出テ、小石川ナル植物園ヲ拝観ス、珍草田芝悉ク集リ、其宏大ナル驚クノ外ナシ（拝観代別ニ記ス）、十時半ニ是ヲ出テ、上野忍池ナル鎮遠号ノ錨ヲ見、次テ東照宮ヲ拝シ、終リテ広小路ナル雁鍋ニテ昼食ヲナシ、湯島牛天神等ヲ拝シテ、家ニ帰リシハ三時頃ナリキ、

十一日、八時父上帰郷セラル、午后萩野先生ヲ訪問シ、仕官ノ事ヲ依願セシニ史料編纂ニ人ノ欠乏セル事ヲ聞キタルヲ以テソコハ如何ニトノ事ナレハ、打喜ヒテ願ヒシニ紹介状ヲ下サレンヲ以テ、帰テ先生ニ御相談申上シニ、宜シカラントノ事ナルヲ以、翌日此ニ着手セントシテ寝ニ付ク、